史伝閑歩

森銑三

中公文庫

中公文庫
史伝閑歩
©1989
一九八八年一二月二五日印刷
一九八九年一月一〇日発行
著者　森銑三
発行者　嶋中鵬二
整版印刷　三晃印刷
カバー　トーブロ
用紙　本州製紙
製本　小泉製本
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
ISBN4-12-201582-0
定価　四六〇円

中公文庫

史伝閑歩

森　銑三著

中央公論社

目次

史伝閑歩

将軍家斉の人物　一一
吉宗将軍と鰹節　一九
鍋島閑叟と古賀穀堂　二七
熊沢蕃山遺事　三四
天保改革余話　四〇
徳川幕府の機密文書　四七
奸物鳥居耀蔵　五四

*

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

愚侯と賢侯と　六一
海舟・鉄舟・泥舟　七〇
本草学者直海元周　七七
土井聱牙逸事　八二
菊池三渓の間宮林蔵訪問　八八
馬琴とその日記　九二
後藤象二郎邸の狸の置物　九八
沼波瓊音・岩本素白の面影　一〇五
大類伸博士の思い出　一一〇
*
四十九名家執筆の『古人評論』　一一五
明治の人物一千人　一二三

*
土木請負師服部長七　一三八
料理屋平清の開業　一五一
俗謡漫談　一六〇
落語「千早ふる」小考　一六五
名子役中村吉右衛門　一七〇
石井鶴三さんの画稿　一八五

随筆というもの

随筆というもの　一九三
浅野梅堂の『寒檠瑣綴』　二〇二
香亭雅談　二〇九

中根香亭の『酔迷余録』ほか　二一七
信夫粲の『恕軒漫筆』　二二四
矢野竜渓の『出鱈目の記』　二三二
沼波瓊音の『大疑の前』　二三九
篠原温亭著『その後』　二四六
正岡子規の随筆　二五四
斎藤緑雨の随筆　二六二
幸田露伴の「ひとり言」「人の言」　二七五
漱石の『硝子戸の中』　二八三
吉村冬彦博士の『柿の種』　二九〇
ゴシップで綴る人物随筆　向井　敏　三〇三

史伝閑歩

史伝閑歩

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

将軍家斉の人物

徳川十五代の将軍の内でも、初代の家康や、二代の秀忠は、人物がはっきりしていて、問題がない。しかし三代の家光となると、もう面倒になる。三宅雪嶺など、家光をもって一の英雄漢とする。その反対に、三田村鳶魚はこれを低脳児だったとして、頭からこき下している。

五代の綱吉は、犬公方などといわれて、十五代中での難物であったらしい。そこへ行くと、八代の吉宗は家康型で、人物が堅実で、しかも家康のような腹黒なところがなくて、家康ほどに器は大きくなかったにしても、好感が持たれ、敬意が表せられる。

十一代の家斉は、寛政から文化・文政へかけてのよい時代に、五十年にわたって将軍の職に在って、大御所様としてたたえられた好運の人である。これという悪評もこれまで耳にせず、どちらかといえば、好感を寄せていたのであるが、最近に一つの文献に接して、私の家斉観は、ぐらつく結果を来たしてしまった。もちろん、その文献一つをど

こまでも信用して、家斉の人物性行はかくのごとしと断じたりするのは軽率で、慎重な態度を欠くことになろうが、私の見つけたその文献を、一の資料として紹介して、なお今後の公平な判断をまつことにしたい。私はその文献を、「想古録」と題する古い記録の中に見出したのである。「想古録」そのものについては、なお後でいうことにして、まずその条の全文を掲げる。江戸時代の末期に成った仮名混り文で、むつかしくもなんともないものであるから、原文のままに出すこととする。どうか億劫がらずに読んで貰いたい。

「楽翁公、閣老の職を辞して、水野羽州代りて政権を握りたる後、十一代将軍の左右に出入する者は、すべて阿諛佞曲の俗吏のみにて、将軍に向ひ直言諷諫を申上ぐるもの一人だになく、これに因りて、将軍の驕傲は日に募り、天下の政治は無為にさへあれば泰平なりとの誤解を、将軍の胸中に起さしめたり。近年凶荒打続きて米価騰貴し、都鄙の別なく、餓莩路に満つるの惨状を究むるも、将軍毫も之れを知らざるなり。大塩平八郎、貧民救助の主意を以て、乱を大坂に起したるも、将軍は百姓一揆と見做して、何の心痛せられざるなり。只だ佞臣を近づけて、夜となく日となく遊び戯れ、今歳は首尾よく御代換りが済みたれば、取分けめでたきことのみ多しと申上ぐれば、其の申立てたる御側

衆は、忽ち千石の禄を増賜せられ、此の凶荒物騒の世を知ろし召さず、我が無為の美政に由りて、天下の形勢は泰平富裕の世の中となりたりと自負せられたり。将軍の昏迷、此くの如くなりければ、我が智を恃(たの)みて他人が馬鹿と見え、田安老公が学術を好まるゝを毀(そし)りて、三卿ともいはるゝ者が、文学を学び経史を研究するとは、身分に似合はぬ不行状と謂はざるべからずと非難せられ、又た水戸に隠密を出して、烈公の施政を探り、彼れが如く綿密なる世話を焼きては、国の治まる道理なき筈なるがと危ぶまれ、天下の政事は、予の如く金銭を吝(そし)まず、物事を気に懸けず、醒むれば美酒を飲み、酔へば珍味を食し、後宮三百の花の如き美少女を相手として娯しまば、士民は政治の寛仁大度なるに感服し、上の好むところ下亦たこれに倣ひ、都鄙の人心親睦和楽して、民富み国栄え、老幼男女泰平を謡うて、余が徳を称賛するが如き、めでたき世柄となるべきにと誇られけるとぞ。其の昏蒙暗愚も、ここに至りては、之れを医するの道なきなりと、豊洲翁の眉を顰(ひそ)めて語りたり。（羽倉用九）」

最後に附記してある羽倉用九は、すなわち簡堂である。「想古録」の著者は、簡堂先生より聴くところを、そのままに筆録して置いてくれたのであった。簡堂はそれを勘定奉行の岡本近江守より聴いたのだったことが、明記せられている。近江守、名は成、花

亭の号で知られているが、別に豊洲とも号している。右の文中に「豊洲翁」とあるのは、すなわち近江守なのである。「想古録」の著者は、まだその人が突止められないが、その人はまた信頼の置かれる士人だったところから、簡堂も、心置きなく、かような秘話を洩らしたものと思われる。「想古録」に記すところは、一夕の談話というに過ぎなかったかも知れないが、それが岡本花亭より出た話ということを考える時は、その内容には、相当の信憑性の存することを認めてよいのではないかと思われる。

将軍家斉その人を、貴下はどう考えるかなどという質問を発しても、それについて即答のできる人などは、近世を専攻する史家の内にも少いのではないかと思われるが、右に掲ぐる記述に拠って、その家斉の人物は、岡本花亭の眼にかように映じていたという事実が知られるだけでも、その記述には喜ぶべきものがあるといわれようかと思うのである。

「想古録」中に、家斉についての右のような記述のあることを知ったのは、私にとって近来の欣快事であった。しかしその「想古録」は、容易に触目することを得ない特別の書物でも何でもなかった。実はそれは七十何年前の新聞に掲載せられて、すでに活字になっているものなのである。私はその一事を告白して置かねばならぬ。

この数年来、明治・大正の新聞の閲読を、私は続けているのであるが、『東京日日新聞』は、初期の数年分のものを、ずっと前に見、それから間を飛ばして、明治四十一年以後のものを、この間見た。その中間をまだ見ていないので、このほど思い立って、明治三十一年から四十年に至る十年間のものに、目を通すことにした。そうして閲覧にかかったら、三十一年の同紙に「想古録」と題する連載記事があり、その内容に旧幕時代の逸聞の記されているのに、興味が持たれる。それでややていねいに見て行ったら、三月六日所掲の二条の内の一つに、右に紹介した一条の記載があったのである。

すでに活字にもなっているものを、事々しく振廻したりするのは、みっともないかも知れないが、明治三十一年から今日まで、既に八十年近くを経過しているのに、右の家斉のことはもちろん、「想古録」そのものも、それを使っている人のあったことを知らぬ。かような好記述が、埋もれたままでいるのではないかと思うと、いかにも残念なので、まずその家斉のことの条を、ここに紹介したのである。

しかし、『日日新聞』では、その「想古録」を連載するのに、通し番号を附けて置いてくれなかった。その「想古録」中の箇々の条にも、通し番号は附けてない。だから「想古録」は、いつから掲載が始められて、右の家斉の条の出た三月六日の分は、第何回になるのかがわからない。「想古録」の第一回の出たのはいつだったのか、その一事

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor